

不確實である空氣や火や水の如きは火急に贖罪を要しないやうに考へられたものだから、自然その重大性を失ひ祈禱讚歌に於いても嘆えられることが少なくなつたことは大いに注目すべき事である。

上述の吠陀諸神に加ふるに、耶摩(Yama)——初めは死者の靈魂を支配する神であつたが後には死者の裁判官となつた——の名を以てすれば吠陀の讚歌曼怛羅の頌せる主要なる神々は記述し盡されることゝなる。(つゞく)

## 人種問題と淨土教徒

石井 教道

—

大正八年六月、巴里に於て媾和會議の開かるゝや、我國代表者は、幾多問題の中から人種平等案なるものを提出したが、重大問題として後日附議さるべく延期せられ、昨年十一月、ゼネバに於て國際聯盟會議の第一大會の開催せらるゝ報の傳はるや、日本代表者が再び人種平等案を提出するや否や、而して其結果如何は、頗る興味ある問題として世界各國の視聽を惹いた。然し此れも亦周圍の事情に鑒み、適當なる機會を

待つといふ聲明を爲したと等すべて吾人の記憶に新たな事件である。事實はかくのじこく悲しむべき事情の下に埋没されて了ふたのであるが、我等日本國民として、殊に佛教徒としては、之が不斷の宣傳と實現方法に對して重大なる責任を有する事を覺悟せねばならぬ。何者、此れ實に佛教の根本精神に反するのみならず、聽て世界の擾亂する恐るべき種子の胚胎せるを見るからである。

曩に獨のカイゼル皇帝は黃禍論を稱へ、今亦米の大統領ハーディング氏は、人種的差異は幾多の危機を胚胎す、人種的差異による軋轢を除去すべく太平洋沿岸諸州を後援せねばならぬと公表し、又彼の濠太利に於ては白濠主義なる標語を新造して褐色人種の排擠を高調して居る。此外、英の史家ストツダード氏は、白人の世界的優越に對する有色人種の擡頭なる一書を公にし、白色人種と有色人種とは古くより衝突して來たものであつて、今後の妥協點は何うしても白人は亞細亞に於ける優越的地位を地棄し、有色人は永久に白人の地に移植することを斷念する事に存せねばならぬといふて居る。勿論之に對しては種々の批評もあるやうだが出來るものではない、所謂世にいふ感情動物である吾人は、判つて居るが何となしに厭な氣がする情意の衝動に對しては、何うしても其の尤も淳化されたる大慈悲の灌頂に依つて心から鎔け合

はねば駄目である。多くの浄土教信者が、自から如來の慈悲に懷かれた喜びは一切衆生へと廻向し、皆共成佛道の志を起されたのは全く此處に基調して居るのである。上人が「念佛の聲する處、海人漁人の苦屋まで皆我が遺蹟なり」と仰せられた所に思ひを秘めねばならぬ。

白人の多くは、有色人は先天的劣等種であつて、白人は先天的優良種であるかの如き謬見を懷いて居るやうである。甚だしいのは、白人の血に有色人の血の混すること、は文明の前途を阻止するものであるかの如き奇矯の言を弄するものさへあるやうである。蓋し此れ一は産業上の恐怖と、一は自惚と、一は宗教の差異とは、彼等をして前途憂ふべき思想を起さしむるに至つたやうに思はれる。加ふるに、渡航者の道徳上如何はしい行爲が少からず彼等をして劣等視せしむる要素を爲したでもあらうが、左ういふ事に依つて直ちに有色人種と白人種との優劣を論定せしむとする事は、人道論上許すとのできぬのは勿論、同一權利の下に形成されて居る國家の人種に軒輊を認めて待遇を異にせむとするのは大なる謬りである。尤も世界人種分布の系統を逐ふて分類したものに、少きは二分説から多きは六十三分説もある。リネアス氏は白色人種、赤色人種、褐色人種、黑色人種の四分説を立て、ラサム氏は蒙古種、亞弗利加種、歐羅

巴種の三分説をなして居る。乃至其他の分類法中何れが科學的の分類法として價值あるかは専門でない吾人の判定の限りではないが、皮膚の色の異りと云ひ、又構造の上にも多少相違のあるのは事實のやうである。左ういふ人種は素と五十萬年此にも異説はあ  
るが今且らく最長説を  
あげたの昔し源、人の上に差があつたか何うかといふに、此にも人類一源説と人類多源説とあつて各々理由も附加されて居るが、比較的多源説が合理的のやうに見える。たとひ人類として始めて地上に現はれた場處が澤山あつて祖先を異にして居るとしても、俱に高等動物といふ同一水平線上に置かるゝことには異議はない。然し吾人は左ういふ國際間に於ける政治上の權利や、又地質學や解剖學等に依つて歸納された人類學上人種の差別なりや平等なりやを論せんとするものではない。元來國內に在つても所謂の新兵など稱して蔑視する惡習を有し、又他國に送つた同朋の品性等をも咎めずして、徒らに人權問題を振り廻す事は可能ぬ。唯だ吾人はさういふ人種に對する彼等の根本的の僻見を斷じ、以て永久の世界的平和を期せねばならぬといふ事を我が佛教々義の上から論及してみたいのである。

## 二

釋尊の人種に對する見解は極めて明了である。大聖釋尊の出世以前から、彼の印度

には四姓階級の嚴として犯すことの出來ぬ制度があつた。其の階級間の墻壁は、今日問題を爲して居る資本對勞働の間隔どころではないやうである。然るに大師は、身自ら高階級たる刹帝利族に生れながら、一たび宇宙の眞理を覺悟し給ふた曉きには、四姓佛門に入れば悉く釋氏と號すと布告し、事實最下位的首陀羅の發心修行して覺悟するものあれば、同じく羅漢として尊稱を與ふるに吝ではなかつたのである。眞理の前へ、大道の下には萬人等しく同一水平線上にあらねばならぬ。然し釋尊は一面に絶對平等を主張しながら、他面に於て其の眞理表現の程度に因縁に依る差別的様式の異りある事を論せられて居るのを忘れてはならぬ。天台の語をかりて云はゞ「因果を宗となし、差別實相を體となす、平等」と云ふべく、華嚴の語を使ひて之を云はゞ「因果緣起、差別理實法界、平等」である。如何に人權や人格の平等を主張しても、過去現在の諸種條件に依つて其の人の有する尊き力を全分使用し得るものと使用し得ぬものとの差異のあることは否定の出來ぬ事實である。しかし吾人はいつも其の平等の原理を省み、且つそれを基調として進み行く事を心懸けねばならぬ。所謂平等の原理とは社會共同の最高眞實體であつて、佛敎の術語では實相、眞如、法性、佛性、本覺、如來藏等といふのである。

人が何故に平等に尊いのであるかと云ふ事は、唯だそれ社會共同の理想、即ち眞如實相の妙境界を實現すべき可能性を有するものゝ中に人が尤も適して居るからである。然し其の可能性即ち佛性は萬人等しく具有して居るか如何うか。勿論釋尊は寧ろ所有る生物の具する尊い不滅の力となし給ふたやうに信じられるが、廣く佛教學派の説を稽へてみると直ぐさま然りと斷言する事が出来ぬ。然も其の思想の徑路が恰も人種平等案の前途に何事をか語つて居る如にも思えるから簡單にそれを述べてみやう。

初めに小乘に依ると、萬人の出發點は白紙のやうに異りはないが、吾人の進むべきの理想を聞いて非常に踴躍するとき、即ち順解脱分の善根を植ゑるときに其の種が生じ、更に進むで現象諸法の眞相を確認し得る位ひ、即ち苦法智惠の觀位に至つて初めて佛性が不滅の力となるのであると論じ、佛性なるものは決して萬人共通の力であるとは見做さぬのである。蓋し此れ凝然等の言ふ如に、小乘に於ては本體を建てぬ隨つて其の上に佛性を論せぬから、佛性の普遍性を語る事が出来ぬのである。

次に大乘唯識學派では、人性の上に先天的差別を認めて五類と分つて居る。所謂五とは、一に決定性聲聞と稱し、四諦の法を觀して消極的涅槃界に消えゆく先天性を

有して居る一類のものをいふのである。二に決定性縁覺とは、十二因縁の法を觀し、之れ亦身心都滅の境地に行くのを理想として居る本性を有するものを指すのである。三に決定性菩薩といふのは、六度の行を修し、永遠不滅の理想を自他平等に實現し得る可能性を有するものをいふのである。四に不定性とは、如上三種の二又は三の先天性を合せ有し、努力の如何に依つて何れの先天性を發揮するや不明の者をいふのである。之に無性有情といふは、最高理想を實現すべき先天性を具せず、僅かに人天界に行はるゝ道德を以て最高善の如く考へて居るものをいふのである。之を法爾五性論とも稱し、人種に先天的優劣の差ありと論斷するのは、丁度人種の差別を皮膚の色合に依つて其の本性までも論及せむとする説に似て居る。蓋し此れは賢首法藏が五教章に比評して居るやうに、唯識學に於ては小乘と異つて大體を建て、現象との關係は説くが、其の本體たる本と常住不變の非活動體なりと見做し、生滅變化ある活動的現象との同體的關係を説かず、寧ろ現象の本原は同じく生滅變化の活動體でなければならぬと論じ、それを阿賴耶と稱した。その阿賴耶は個々の差別體であり又總括體である。既に個々の始源的本體を差別體と爲すから、其の結果人性論上差別觀に立つやうになつたのである。

後に三論、華嚴、天台等の所謂る實大乘と稱する學派に在つては、等しく一切衆生悉有佛性と論じ、萬人同じく尊い力を有したものと爲すのである。然し其の論據は各々其の學派の最高教義に基調して居るから違つて居る。即ち三論は絶対空論に據り、華嚴は絶待唯心論に由り、天台は色心實相論に立脚しての結論である。それ等の説を一述べる事は煩はしいから、且らく華嚴の説明を一言する事にする。華嚴學に於ては宇宙の本體を絶対心となし、現象の事々物々は悉く其の全表現である。換言すれば現象即實在であるから、隨つて現象相互の關係も複雑な條件の下に相即相入して居ると説くのである。其の絶対心を賢首は甚深緣起の一心と稱し、清涼は總該萬有一心と名づけ、寺峰は賢實心と言ふた。其他圓覺經には圓覺妙心と云ひ、涅槃經等には佛性と云ひ、起信論等には覺、自性清淨心等といふて居る。斯様に吾人は本來佛性眞如の顯現であるから、萬人等しく尊い人格者であつて、敢て其間に甲乙丙丁の差別を認むべきではない。此處に立脚して人種の平等が論せられるのである。然しその佛性力用の表現程度に至つては、種々の條件因縁の差異に依つて一様ではない。茲に佛、菩薩、衆生等の區別が存する。賢首が終教分齊の説として掲げて居る彼の暫時の五性、詳言すれば本來平等の同一佛格具有者ではあるが、因縁に依つて現在一生の中は何うしても個



人主義の改まらぬ二乗や、二利圓滿を理想とする菩薩や、現實より一步も崇高な理想世界へ履み出す事の可能ぬ無性有情などがあるといふたのも此の意ろである。勿論此は根本的質の問題ではないが、悟つた眼から此等五性の體を觀れば、本來立派な覺體成就の佛格者である。唯々各自は自覺せぬのみであるから、釋尊出世して法鼓を鳴らし給ふたのであると示すのが華嚴性起の説明である。然し吾人は此の釋尊の眞劍な説法を徒らに聞き流してはならぬ。今日の如き、或は民族自決とか、人種の差異とかいふて相互に確執を持して未來の平和を攪亂する素因を蒔きつゝあるときに當つて一層此の精神運動を興さねばならぬ責務を有する。古來佛教史上の偉人の精神運動の基調する所は、多く左ういふ偏狹なる特權的差別的、特種意識に對する一般民衆の恐るべき不平の將に噴火せんとして伏在して居るところにあるやうである。近くは彼の傳教大師が山林佛教を高調したのもそれである。當時奈良佛教特に其の主腦を爲した人性の先天的差別を主張する唯識學派と、而して之と苟合せるある閥族の專横とは、何うしても平安の遷都山林佛教の開拓を爲さねばならなかつたのであつた。又、宗祖法然上人の開宗も、確かに精神界に於けるある特權思想の打破にあつたのである。

上來略して人種差別論に對する一般佛教の態度を略叙したが、未だ「摩訶衍」に於ける態度を特記して居ない。抑々法然上人主張の淨土教は、如上人種の先天的差別をなす相宗に屬するか、或は又一切皆成佛論の性宗に立脚して居るのかといふに、勿論後者に在ることは餘りに明白な事實である。曇鸞の入一法句、善導の五乘齊入、上人の弘願一乘は正しく其の精神である。問師之に由つて糝鈔等に、古來性相兩宗係争の具たる三車四車の形式を論じ、而して淨土宗は正しく四事宗にして一性皆成佛論であることを明瞭にせられた。素より阿彌陀佛が、所謂衆生をして悉く同一佛陀の體顯を爲さしめたいとの希望の下に建てられた第十八願に「十方衆生」とある文に據りて立宗された、然も上人自ら性宗に育つて其の上に立教された淨土教であるからには左うあるのが至當である。但し十方衆生とはあるけれども、善導大師は別に「謗法と無信と八難と人非人とは是等は受けざるなり」と簡別して居られる所をみると、恰も唯識學にも能くいふ一分の一切のやうにも見えるが、それは賢首の所謂暫時五性と同類のものであつて根本的のものではない。左うでなければ、賢首が替て若し一人でも自分と同一體驗を爲さしめる事が可能ぬやうな慈悲であつたならば、斷じて同體の

大慈悲なぞと稱すべきでない」と論じた如に、佛心者大慈悲是の觀經の文意が徹底せぬ事になる。而して茲に吾人の大に注意を要する點は、人類平等の本質的解釋としては諸學派と我が宗義と異なる所はないが、之を素地とした上に、有覺無覺の一切衆生、殊に現實の苦に懊惱めるものを救濟せむとて所有る苦行を爲して現に立派な覺體を成就し給へる阿彌陀佛無限の大慈悲に懷かれたる慈悲の子としての人類平等の教へは、實に此の種の論の上に、一大特色を有するものである。五乘齊入と云ひ、弘願一乗と云ひ、それら思想の内容を爲して居るものは皆如上の意味に於てある。假令ひ吾人は人類は平等である。否一切の生物、乃至一切萬法は本來同一平等であるといふ事を知り盡して居ても、何となしに厭な氣がしてさうは思へぬ、吾人は感情の動物である。さういふ情意の衝動に堪へられぬ凡夫性の吾人としては、何うしても如來の大慈悲弘願一乗の裡に鎔合されることより外に可能ぬのである。丁度、我が日本國民は上み御一人を大宗家の御親となす同一赤子であるといふ感じに依つて、到底他國に於てみることの出來ぬうるはしい國體を形成して居る様に、權利や理論を以て推けつけて行くよりは事實の上に頼る有効である。多くの淨土教先覺者が、自から如來の御慈悲に壞かれた辨びを直ちに同一衆生へと廻向し、皆共成佛道の志固く報恩の生活

に人生の苦を寧ろ歡ばれたのは全く此の泉から流れ出たものである。三帝の戒師として朝野の歸依をうけ給ひし上人が「念佛の聲する所ろは海人漁人の苦まで皆我遺跡なり」と誨へられた所に何とも云へぬ道味がある。蓋し人種平等の理論は既に明白であるが、之を何うして味はしめるかといふ難問題に對する最後の解決はこゝにあらねばならぬ。

インターネット公開許諾のない文章に墨消し処理を施しています。